

## 2013 年度後期学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 戸部 順一

今回の授業評価アンケートは 429 科目を対象として実施。回答科目数は 374 科目で、回答率は 87%を記録した。この数字は 2012 年度後期授業評価アンケートとほぼ同数であり、授業評価アンケート実施に対する重要性への認識は明らかに定着したようである。さて、アンケートの設問項目 1～12 への評点平均値(5 点満点)はどれも 4 点を超えており、文芸学部の提供する科目に対し、学生が強い関心を持ち、且つ、積極的に取り組んだことの表れとして評価したい。2012 年度後期に実施されたアンケートの集計結果と比較したとき、1～12 の設問項目の評点平均値はほぼ同点という結果を得られ(設問 1, 3, 5 は同点、設問 2, 4, 7, 8, 9 は上昇し、設問 6, 10, 11, 12 は下降した、という結果であったが、その増減の範囲は設問項目 4 の 0.06 ポイントの上昇、設問項目 9 の 0.07 ポイントの上昇を除いては、すべて 0.05 未満に収まるものであった)、教員の授業に対する取り組み、また授業展開に関する工夫は、学生に「概ね好評」と受け止められている状況が維持されている、と言えそうである。今後もこの努力を続けてゆくことを望んでいる。

成城大学は現在、学生の主体的学び=アクティヴ・ラーニングを推進しているところである。設問項目 9 は教室内での学生の授業参加度を計測しており、その評点平均値(2013 年度後期の評点平均値は 4.17)が 2012 年度後期と比較して 0.07 ポイント上昇していることは、学生の授業への主体的取り組みの向上を示しており、大いに歓迎したい。ただ、主体的学びとは教室外での学生の勉学が中心であるべきであり、現在実施されているアンケート項目には学生の教室外での勉学量を計測する項目がない。予習復習の程度を、例えば週ごとに何時間程度行っているのかくらいは聞くべきであろう。

毎年実施されている学生による授業評価で文芸学部の提供する科目は高い評価を得てきた。これは喜ばしいことではあるが、この高評点は設問項目の立て方の所以と思われるところもある。設問項目の工夫により、学生の本音をもっと聞いてみたい気もする。アンケート項目の充実を望むところである。